

第5表 早期前半編年表

	中九州東部	中九州西部	南九州西部
早期前半	政所式 川原田式 稻荷山式 早水台式 下菅生B式 田村式 ヤトコロ式	中原式 稻荷山式 早水台式 下菅生B式 沈目式 石清水式	前平式 知览式 吉田式 倉園B式 石坂式 (押型文土器) 手向山式 桑ノ丸式
		?	
			—
	大分県編年	木崎編年(1995)	新東編年(1992)

器がそれにあたろう。また、類手向山式土器として第III章で報告している屈曲胴部を持たない土器も、この型式に属するものであろう。

このように、中九州西部地域の押型文土器は、「稻荷山式→早水台式→下菅生B式→沈目式土器→石清水式土器」という変遷を示すことが判った。これを編年表として提示し、併せて、中九州東部と南九州西部との編年対比を試みている（第5表）。

なお、ここでは言及しなかった土器として、撚糸文土器・条痕土器・無文土器がある。こうした土器もまた、型式学的研究をおこなうことによって、編年的な検討が可能となろう。ただし、今回は時間的な制約があって、ここまで検討範囲を広げられなかった。そうはいっても、こうした問題を解決することが、編年研究が遅れている中九州西部地域の現状を打破することもある。今後、こうした方面までも検討の対象にする機会が必要であろう。

### 3. 石器組成から見る食物獲得活動の特徴

無田原遺跡における縄文時代早期の石器組成についてみてみよう。関係資料310点の中、石鏃11点、尖頭器1点、尖頭石器6点、削器14点、抉入石器1点、石錐1点、楔形石器5点、打製石斧1点、石錘4点、有溝砥石1点、磨石・敲石14点、石皿・台石4点、

二次加工ある不定形石器10点、使用痕ある剝片10点、石製品4点、石核21点、剝片・碎片202点という内訳であった。これをそれぞれの活動の種類ごとに区分してみてみよう。

狩猟・漁撈具は、石鏃、尖頭器、尖頭石器、石錘がそれである。出土点数は22点で、石器の中に占める割合は27%で、狩猟具のみでは22%である。

植物食処理具は、磨石・敲石と石皿・台石である。出土点数は18点で、石器の中では22%という割合である。

解体・工作具は、豊富である。その該当石器には、削器、抉入石器、石錐、楔形石器、打製石斧、有溝砥石、二次加工ある不定形石器、使用痕ある剝片がある。出土点数は43点で、石器組成の中に占める割合は、51%である。なお、こうした石器も、その用途別にさらに区分されるかもしれない。例えば、解体調理と工作は、その区分原理としてもっとも考え易いものである。ただし、ここではそこまで突っ込んだ検討をする訳ではないので、一括して処理している。

祭祀関係の道具は石製品である。4点が出土している。

さて、無田原遺跡での生産活動を問題にする時、狩猟・漁撈活動と植物食獲得活動の比率を石器組成

の中から読み取ろうとすることが良く行われている（米倉1984, 染畠1991）。おそらく、通常の遺跡では、こうした分析をおこなわざるを得ないだろうが、問題も多いことを認識しなければならない。

一つ目は、狩猟・漁撈具を使用する場と、植物食加工具を使用する場が異なっているということである。つまり、本来、集落内で使用されるものと、集落外で使用されるものを、集落遺跡内で比較するには問題が多いということである。また、併せて、一個の石鎌と一個の磨石・敲石とでは、使用回数が異なることである。従って、出土数の比較にはこの問題点も認識しておこなう必要がある。

二つ目は、通常の遺跡に残された石器のみでは、植物食獲得活動の多様性を認識できないことである。つまり、磨石・敲石や石皿・台石は、堅果類の処理に使われるだけであり、植物食の対象はもっとも多様なはずである。要するに、集落内から出土する植物食関係の石器は、当時の植物食のほんの一面を表しているにすぎないということである。

以上の問題点を認識した上で、これから検討をおこなっていくことにしよう。

無田原遺跡では、出土石器点数は少ないが、多様な種類の石器が出土している。その活動別の集約は、前記しているとおりだが、その中で、狩猟・漁撈活動具と植物食処理具を問題にしてみよう。そうすれば、それぞれ27%（狩猟のみでは22%）と22%というように、お互いが拮抗した関係で存在していることがわかる。

次に、近隣の遺跡をみてみよう。

大津町中後迫遺跡では、狩猟・漁撈具と植物食処理具とが石器組成の中で占める比率は、それぞれ46%と43%である。いずれの道具も石器組成内では数值として高いデータであるが、二次加工ある不定形石器や使用痕ある剝片が含まれていない関係からだろう。同町瀬田裏遺跡では、はっきりした数量のデータが示されていないので、出土点数で比較しておこう。それぞれ331点と259点である。明確な比較は、このとおり定かでないが、無田原遺跡や中後迫遺跡と同じ傾向の可能性が高い。益城町櫛島遺跡では、それぞれ22%と17%である。いずれも狩猟（・

漁撈）具が植物食処理具をわずかに上回るが、ほぼ拮抗するという、無田原遺跡でみられるような傾向を見て取ることができるようだ。

次に、調査が進んでいる熊本県南部の人吉盆地に目を転じてみよう。山江村狸谷遺跡では、狩猟（・漁撈）具が24%，植物食処理具46%である。同村丸・藤ノ迫遺跡では、27%と41%である。人吉市白鳥平A遺跡では、16%と71%である。同市白鳥平B遺跡では、20%と40%である。また、同市天道ヶ尾遺跡では、12%と44%である。このように、人吉盆地の遺跡では、軒並み、植物食処理具が狩猟（・漁撈）具を倍以上上回る出土率を示している。つまり、無田原遺跡周辺での石器組成とは大きく異なる様相なのである。

では、無田原遺跡周辺の石器組成と人吉盆地の石器組成とが異なる様相を呈しているのは、なぜなのだろうか。この問題が整理できれば、無田原遺跡での人びとの生活における、食物獲得活動の特徴が明らかにできるかもしれないし、そうでなくとも、ある程度の予察が可能かもしれない。

無田原遺跡では、狩猟・漁撈具が植物食処理具をわずかに上回ってはいるが、ほぼ拮抗した比率で存在していた。これは、表面的にはこの両者が背景となつた食物獲得活動が平均的に行われていたという理解に結びつきそうである。ただし、問題は、先に指摘しておいたように、それぞれの道具を使用する場が異なったり、それぞれの石器では使用回数が違っているということである。こうした点を勘案すれば、集落外で使用され、しかも石器一個の使用回数が少ない道具—石鎌については、現有の比率よりも少し膨らませて考える必要があろう。つまり、無田原遺跡での狩猟・漁撈具と植物食処理具との比率は、 $27 + \alpha\%$ （狩猟のみでは22%）対22%ということである。要するに、無田原遺跡での食物獲得は、狩猟・漁撈が中心であったということになろうか。ただし、問題点でも指摘しておいたように、植物食の一面しか示されていない道具もあるので、厳密には、狩猟・漁撈活動が堅果類採集活動に勝っていたという表現が適切である。そして、無田原遺跡周辺の遺跡では、同じ石器組成の特徴を持っていることから、こ

の地域一帯では、上記した表現の生活がおこなわれていたことを予想させてくれるだろう。

これに対して、人吉盆地の遺跡では、狩猟・漁撈具と植物食処理具の比率で、植物食処理具の方が倍以上の出現率である。これを無田原遺跡の石器組成で検討したような方法で考えてみると、狸谷遺跡では $24 + \alpha\%$ 対46%，大丸・藤ノ迫遺跡では $27 + \alpha\%$ 対41%，白鳥平A遺跡では $16 + \alpha\%$ 対71%，白鳥平B遺跡では $20 + \alpha\%$ 対40%，そして、天道ヶ尾遺跡では $12 + \alpha\%$ 対44%という比率関係である。つまり、白鳥平A遺跡を除けば、二つの活動は見かけよりも拮抗した状況にあるようだ。つまり、人吉盆地内での食物獲得活動は、狩猟（・漁撈）活動と堅果類採集活動とを並立させた形態のものであった可能性が高い。

以上のように、可能性として、無田原遺跡周辺では狩猟・漁撈活動が堅果類採集活動を凌いでいた生活形態であったのに対して、人吉盆地内では狩猟（・漁撈）活動と堅果類採集活動とを並立させた生活形態であった。仮に、こうした想定が可能であるとするならば、この二つの生活形態の差は、何に起因しているのだろうか。三つの起因要素を考えてみたい。

一つに、人吉盆地内の遺跡では、より定住性の強い集団が生活を営んでいた可能性が高いだろう。それは、堅果類採集活動の割合が高いという点からそういうようし、石皿・台石の出土量の多さもこのことを傍証しているようである。これに対して、無田原遺跡では、堅果類採集活動の割合が低く、必然的に遊動性が高いということが考えられようか。

二つに、季節的に生活圏が変更された可能性がある。例えば、人吉盆地では、狩猟活動や堅果類採集・処理活動といった秋から冬までの活動が行われる遺跡が多く、無田原遺跡周辺では狩猟・漁撈といつては冬から春にかけての活動がおこなわれていたというのである。中九州西部における当時の人口との生活圏がどれくらいの範囲にあったかは現時点では判らないが、数10kmという単位で、生活圏の変更を季節的な移動としておこなっていた、その結果の可能性もある。

三つは、植生の違いが考えられよう。安田喜憲氏復元による9000年前の植生図（安田1980, 1982）を

参考にすれば、無田原遺跡周辺は冷温帯落葉広葉樹林と照葉樹林との境付近で、人吉盆地は冷温帯落葉広葉樹林の中にあたっていた。

冷温帯落葉広葉樹林が広がっていた人吉盆地に住んでいた人びとは、クルミ・トチノキ・ハシバミ・ミズナラなどの堅果類が多く採集できた。また、その森林帶の南限でもあり、暖温帯落葉広葉樹林のコナラ・クリなども見られたかもしれない。つまり、当時の入吉盆地は、植物質食料の宝庫であった。これに対して、無田原遺跡周辺は、冷温帯落葉広葉樹林と照葉樹林の境付近にあるという関係上、木の実の採れ高は人吉盆地内よりも少なかったはずである。堅果類採集活動が低調な生活形態を示す無田原遺跡周辺と、狩猟（・漁撈）活動と堅果類採集活動とを並立させた生活形態の人吉盆地とは、こうした植生の違いを反映していたのかもしれない。

要するに、無田原遺跡の石器組成を通して当時の人口との食物獲得活動の特徴は、上記した三つの起因要素を絡めることによって理解できるだろう。ここでは、そういう可能性を想定しておきたい。

#### 4. 無田原遺跡の石製品が語るもの—縄文時代早期の祭祀行為の一側面—

仮に、前項で述べたように、冬から春にかけての生活空間として無田原遺跡があったとするならば、今回出土した石製品には、当時の祭祀の一側面を語らせることができるだろう。

無田原遺跡では、4点の石製品が出土している。その種類は、男性器形石製品、磨製異形石製品、剥片製異形石製品であった。再度、これらの資料を取り上げてみよう。

男性器形石製品は、文字通り、男性の性器をかたどった石製品である。棒状の偏平な砂岩礫を使用し、その先端近くに横位の刻みを巡らし、同じ刻みを先端に縦位に入れた作りである。その形から、非日常品であり、しかも祭祀に関係する物と推定される。

ところで、これに類した石製品を出した遺跡が無田原遺跡の近くにある。それは、大津町瀬田裏遺跡である。ここでは、無田原遺跡のものよりも幅広で寸詰まりであるが、その作りではよく類似している。